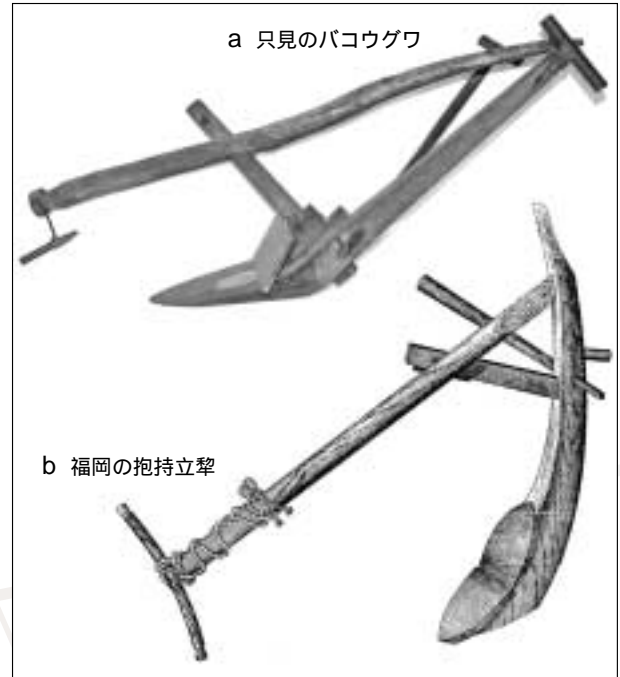


犁の比較民具学 東アジアの民族移動
河野 通明 KONO Michiaki

只見の犁は抱持立犁ではない 右図のaは只見町で使われていたバコウグワ(犁)で、『図説 会津只見の民具』には「大正時代に使用された 抱え持立式」と説明されている。だがbの明治時代に福岡県人の広めた抱持立犁とは明らかに別系統で古い型。では、いつ、どこから伝わったのか。
犁の形と地形・土質は無関係 むかしから北九州では小振りな無床犁が使われて、近畿地方では長床犁が使われてきた。そして小回りのきく無床犁は畑作用、犁床が長く安定のいい長床犁は水田用ともいわれてきた。ところが福岡県では田でも畑でも山田でも平地の田でも無床犁を使ってきたし、近畿地方では田でも畑でも山でも平地でも長床犁を使ってきた。犁の形は地形・土質とは関係なかったのである。では犁の形は何で決まるのか。



無床犁は朝鮮系、長床犁は中国系 犁はカラスキと呼ばれることからしても日本人の発明ではなく、朝鮮半島や中国から完成品が伝わったのである。そこで朝鮮半島や中国の在来犁と比べて見れば、じつは北九州の無床犁は朝鮮系、近畿地方の長床犁は中国系であった。

無床犁は渡来人の持ち込み、では中国系長床犁は？ 無床犁は朝鮮半島からやってきた多くの渡来人が、生活用具として牛とともに持ち込んだと考えれば辻褄が合う。ところが中国からの渡来人が大挙して日本にきたという歴史はない。にもかかわらず九州から関東まで中国系の長床犁は広く分布している。これはなぜか。

朝鮮系のあとから中国系長床犁の波を被る この手がかりとなるのが伝来時期。朝鮮系渡来人の犁持ち込みは、紀伊半島の首木がウナグラと呼ばれていることから6世紀と推定される。また山口県の海岸沿いにウナグラと呼ばれる別系統の朝鮮系首木が使われていて、ここにも6世紀に渡来人が来ていたことが確認できる。ところがこの地方の在来犁は、朝鮮系と中国系の混血型であり、朝鮮系渡来人による無床犁持ち込みより後に、中国系長床犁が強い圧力をもって普及させられた痕跡と見られる。その時期は6世紀より後なので7世紀であろう。

大化改新政府の長床犁導入政策 7世紀なら唐との民間貿易はまだ行われておらず、政府による遣唐使ルートしかなかった。そして地方制度の整備や遣唐使の派遣状況からすれば、唐の長床犁を導入したのは7世紀中葉の大化改新政府に絞り込まれる。中大兄=天智政権が唐の犁をもとに500ほどの政府モデル犁を作って各地の有力者のもとに届け、コピー犁を作らせて普及を図ったことになる。この大化改新政府が全国に政府モデル犁を配布したという仮説は、7世紀に香川・兵庫・長野県から、日本特有の一木へら犁が出土したことで、検証できた。

純粹朝鮮系犁はなぜ？ 滋賀県や関東地方には、混血していない朝鮮系無床犁が見られる。これは政府による長床犁普及政策の出された以降に持ち込まれたと考えれば辻褄が合う。そうなれば渡来の最後の波、百済・高句麗難民の持ち込みとなる。以上をまとめると、次のような民具の犁の形から地域の古代史を読み出す公式が導かれる。

- a 政府モデル犁 渡来人が来なかった地域
- b 混血型 6世紀に朝鮮系渡来人が来た地域
- c 純粹朝鮮型 7世紀の百済・高句麗難民入植地

只見は何型？ そこで只見はと見れば、Cの純粹朝鮮型で、只見にも1300年前、百済・高句麗難民が入植していたことになる。只見の皆さんはひょっとしてその子孫???。只見の研究はこれからである。